
去った日常

羅針

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

去った日常

【Nコード】

N8596Z

【作者名】

羅針

【あらすじ】

現実逃避を願っても、やっぱり日常が好きな青年と、日常を願っているのに、非現実には巻き込まれる少女のお話

出会い

「うゝさみい」

今日はクリスマス。彼女と呼ばれるものを持ってない暦17年。

名前を古見在こみぞんという。古見 存。

基本、コミゾンと呼ばれている。

眼は黒、少し赤みがかかっている。髪は白。銀髪のほうがあっている表現だ。

銀髪はロングヘアで肩よりちょっと長いくらい。たまに女の子と間違えられるほどの容姿。

容姿端麗、頭脳明晰。女の子が放っておくわけではないのだが、モテない。

クリスマスに独りというのはとても寒い。ましてや、晩御飯を買いに行くとなると億劫になる。

そう、クリスマスツリーのまわりにはカップルどもがうじゃうじゃいやがるのだ。

(ひっそりとしているよ!)

心の底で大声を放ち、空を見る
空を雲が覆っていた。

(一雨きそうだな…… それまでにご飯買っておこう……)
ハロ○ズまで走る。

「ん」

背伸びをした。ハ○ーズの近くの公園でご飯を食べて、そのまま立ち上がり背伸び。

カツサンド3パック、ハムマヨサンド6つ、200g程度の弁当30個。

「足りねえな……」

胃袋をどこに持って行ったのだろう。

この世界には特殊な力を持った人物が、10人いる。

一人は、電撃

一人は、火炎

といった風に、要は超能力^{サイ}だ。P S I^{サイ}を使えるだけで、威張れるのだ。

コミゾンにはこれといったP S Iは無い。

P S Iは、

「99%の才能と1%の活力」があれば引き出すことが出来る人間に最初から備わった力だ。

コミゾンには才能があるが、人生に、完全に無気力だった。

何をするにも無気力・脱力。モテない最大の理由かもしれない。

「何かいいこと起きねえかな……」

夜空を見上げる。いやな予感がする。

ポツポツと雨が降り始めた。

(やっぱりかあ)

帰ろ、と言って地面を見たその時、

「危ない」

「は？」

上を見るとそこには一人の女の子が落ちてきた。

「うわわわわ」

お姫様抱っこで救出

「邪魔」

ヒョイっと腕から逃れると、その少女は空を見上げた

「一般人が紛れ込んでるじゃないか、殺す」

「は？」

キュルルルルと回転する矢がコミゾン目掛けて発射された。

キュイイーン！

その矢は兆弾され、打った男へ戻っていく

「邪魔をするな」

「一般人を巻き込むな」

バチバチと火花を散らす二人。男は未だに宙に浮いている。

サイキツカーか？

少女は手を前にやると「衝撃^{ブレイク}」と言った。

次の瞬間、少女は空に舞い、男と対決していた。

コミゾンは腰が抜けて立てなかったが、何とか逃げた。

翌朝

起きた。朝になったので起きる。

「なんだったんだ昨日は？」

独り言をブツブツつぶやいているコミゾン。

「……うにゅ」

「……」

（何も見てない聞いてない。）

地面では昨日であった少女が寝転んで熟睡していた。

「さ！朝御飯食って学校行こう！」

「……私も」

「……」

場が沈黙する。

「返事は？」

「……」

「返事は？」

「いや……その……」

「返事は？って聞いてんの」

「はい。スミマセン」

「よろしい♪」

「……」

こいつ……中1くらいか？

「何歳？」

「19」

「……嘘だろ？」

バツ！っと食べさせるために持たせていたフォークを俺の眼に突き立てる。

「馬鹿にしたな？」

「スミマセン！」

「よろしい♪」

「……」

「ふーん♪ふーん♪」

出していたサラダとパンと順調に食べ進める少女

「なんでここに来たの？」

年上だったとは……

「行くアテがないから」

「……」

（こんな爆弾娘、いらねー……）

「あ、ちゃんと今日出て行くからお構いなく」

「あっそ……」

いつのまにか冷蔵庫の前に行って片っ端から口に詰め込んでいるこの少女。

「名前は？」

「Qp o 1号」

「……は？」

「あんたには関係ないわよ。固有名はミナトだからそう呼んでくれて構わない

あんたは？」

「古見 存」

「コミゾン？ 本名？それ」

「本名だよ」

「そっ」

「んじゃ、俺は学校行くぞ。お前、適当にどっかいけよ」

「は？ あんたは私とこれからデートよ」

「……は？」

12月25日 <AM>

「俺は学校行くぞ。そろそろマジで遅刻する！」

「やゝだぁ デートデートお」

「何で、俺に、そこまで、固執するんだ？」

「始めて一緒に寝た人だから（ポツ）」

「誤解を招く発言は止めろ」

「いこーよ 25日にもなって学校なんておかしいよお」

「補修だ」

「頭いいのに？」

「テストはまともに……？ なんで知ってんの？」

「貴方のことなら何でも♪」

「俺の名前知らなかったよな」

「あの時はあのとときだよ」

キャラ変わってるよな？絶対。

「あゝ もう！ 補修行なかったらマジで落第なんだよ！」

「いいじゃん。」

「よくねえよ！ お前も早く帰れよ！」

「いーやーだぁ」

「年上の癖に駄々こねるな」

「デートしたいもん」

（なんだこいつ）

「わかった。帰ったら行ってやるから」

「本当！？」

「ああ。うん」

パアッと顔を輝かせ、笑顔で返答する。

ミナトは眼は黄色で釣り眼。

髪は澄んだ透明感がある水色（本当に透明なわけではない）の長めのショートヘア。

寝起きはボサボサだった……

性格はコロコロ変わるからよく分からん。

俺はできるだけ補修を長引かせようと決意して家を後にした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8596z/>

去った日常

2011年12月27日11時48分発行